

# ハンコ・版画と印刷の歴史

ごあいさつ

古資料・古文書には、筆などで書いたり、描いたりという手法で伝えられた情報だけでなく、捺印や印刷によって表現された情報をみることができます。今回の展示では、顔料を付けて押ししたり、刷ったりすることで残された表現や記録に注目して市内の資料を集め、ハンコ・印刷の文化の成り立ちを探ります。文字のない時代に始まったスタンプによる表現から、戦国・江戸時代の個人や職責を証明するハンコ、明治の文人が揃えた印章のコレクション。藩の学校で用いられた教科書の印刷から江戸時代に独自の発展を遂げ、その後の西洋美術にも大きな影響を与えた浮世絵など、ハンコや版画による文化の歴史をご覧ください。

## 1. 筆からハンコ・版画へ

文字や記号・絵画の表現を記録するにあたり、私たちは、棒の先や、筆を使って対象物に描き、記します。それ以外の方法には、道具の先端もしくは平らな面を削り、そこに絵画や文字の情報を記して、直接粘土などの対象物に押し付けるか、顔料を塗って紙などに押し付けた表現、これが判子(はんこ)であり、版画となります。手書きとハンコ・版画の違いは、ハンコ・版画は同じ文字・図柄を繰り返し記することができる点にあります。このような、反復行為が転じて、ハンコの持ち主が関与したことを証明するためのしるしになったり(印鑑)、複数の同じ絵画や文字情報を伝えることを可能にし、ひいては印刷という技術へ発展することになります。

写真は、新発田市下寺内の村尻遺跡むらじりで発見された縄文土器で、刻み目を入れた軸を粘土の表面で回転させながら押し付け、文様を表現しています。このようにまだ文字が普及していない時代から、ハンコの原型が考案されました。焼物の表面にハンコを押す手法はその後引き継おろがれ、鎌倉時代の例をみると、押しであるハンコ文様(押印おしいん)が、窯印かまじるしとなって生産地が特定できる例もあります。



写真1 村尻遺跡出土の縄文土器

## 2. 戦国時代の文書に押されたハンコ

文書・絵画に印が押されるようになると、筆を使って伝えるべき情報を伝え、ハンコは伝えた人が誰であることを証明する手段として用いられます。また、高い身分の武士が多くの文書を作るようになると、文書そのものはゆうひつ祐筆という役職の家臣に書かせ、文書の最後にハンコやサインを記すだけとなります。そのサインのことを書判かきはん、花押かおづといいます。展示した資料は、戦国大名上杉景勝が家臣に宛てた文書で、佐渡に兵糧米六百表を輸送することを指示しています。文末には景勝の朱印が押されています。

## 3. 印を預ける(丹羽長重の印)

新発田藩初代藩主の溝口秀勝ひでかつは、織田信長の重臣丹羽長秀の配下として頭角を現し、敦賀国高浜城主となりました。溝口家旧蔵品の中には、かつて仕えていた丹羽長秀の嫡子長重の印が残されています。このことから秀勝が長重から印を預かり、管理していたとみられ、強い信頼関係があったことを物語ります。丹羽長重は、築城の名手として知られ、東北三名城のひとつ福島県の白河小峰城は、長重が総石垣の城として大規模に改修しています。



写真2 丹羽長重印章

#### 4. 天皇の印・将軍の印

江戸時代になると、官位や役職の任命に関するような正式な文書から、私的な内容が記された手紙まで、さまざまな文書にハンコが押されています。戦国時代にもある程度位が高い人でなければ朱印を押すことはできなかったのですが、この時代にはさらに厳格にルールが定められています。

写真3は桃園天皇からの勅命により、7代藩主直温なお あつの後継者直範なお やす(のちの8代藩主直養)が従五位下に任じられた際の位記で、「天皇玉璽」の朱印が捺印されています。写真4は、将軍徳川綱吉が5代藩主重雄しげ かつからの御歳暮の贈答品への礼状に押された「綱吉」の黒印です。これは私的な文書(御内書)なので黒印が押されていますが、公式な文書では同じ印による朱印状が確認されています。



写真3 8代藩主直養  
任官時の「位記」より



写真4 将軍徳川綱吉  
の「御内書」より

#### 5. 新発田藩主の花押印・黒印

鎌倉時代以降、武士が発給する文書に花押が用いられるのが一般化しますが、江戸時代の中頃には、手書きによる花押だけでなく、花押のハンコも用いられるようになります。写真5は7代藩主直温なお あつ、10代藩主直諒なお あきの花押印、8代藩主直養なお やすの黒印で、大小があり、文書によって使い分けられていました。また、公式の文書ではない藩主の手による絵画や書には私印による朱印が用いられています。



写真5 「新発田藩主 花押印・黒印」

#### 6. ハンコによる屏風絵(陣立図屏風)

武者・御徒士・足軽・騎馬などを表現した木版を墨・朱を用い、各種・同版の印を連続して捺印して、陣形や隊列の配置を表現し、墨書きで説明を加えています。大正4(1915)年に刊行された「江戸記念博覧会案内」によれば、12代藩主溝口直正なご まさが出品した「武者揃図屏風」がこれに相当し、目次に「会津藩ヨリ溝口家ニ贈レルモノ」と記述されています。また、屏風絵ではありませんが、同じ手法、同じ主題で作成された事例があります。一つは日本民芸館所蔵の「武者陣立図帖」(日本民芸館1977年)、もう一つは早稲田大学図書館所蔵の「武田信玄公御旗本備押二行の御作法」(同館古典籍総合データベースより)で、いずれも寛永期・江戸前期とされ、関連性が注目されます。



写真6 「陣立て図屏風」 (部分拡大)

#### 7. 版木本と木活字本

新発田藩は、藩校「道学堂」で用いる教科書の印刷業務も行っていました。道学堂には御版行方と呼ばれる出版に携わる職員が置かれ、サクラ材から印刷の原板にあたる版木を作って60種類以上の教科書を制作していました。版木は、一丁(表裏二頁分)を一枚の板に彫って印刷の原板とします。江戸時代の初め頃と終わり頃に、ひと文字ずつの活字を組み合わせて頁を構成する印刷方法が一部で用いられ、前者を古活字本こ かつ じ ほん、後者を木活字本もく かつ じ ほんとといいます。印刷部数が少ない場合、コストを抑えることができるため、自費出版、私塾の教科書の印刷などで使用されました。梓線の隅が離れている、行中の文字の大きさや配置がずれるなどの差異があります。

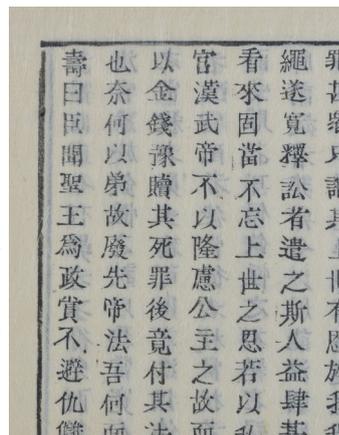


写真7 「刑経」 (木活字版)

## 8. 忠誠義士伝(連作物の錦絵)

浮世絵には筆で描かれた肉筆画と版画による錦絵があります。錦絵とは多色摺りの木版画で、量産が可能のため肉筆画よりも圧倒的に数多く、展示したのもこれにあたります。錦絵は版元が絵師・彫師・摺師を組織し、大量に印刷して出版することで、絵の主題を巷に流布させ、ひいては流行を生み出すメディアとして、江戸時代の大衆文化を担っていました。

安兵衛文庫の中に歌川国芳による赤穂義士ゆかりの錦絵「誠忠義士伝」全50枚が登録されています。これは、江戸末期に歌舞伎の仮名手本忠臣蔵が大流行し、弘化4(1847)年から嘉永6(1853)年にかけて忠臣蔵の登場人物50人を武者絵として描いたものです。規制から逃れるために義士の本名を脚色しています。義士が揃いの衣装をまとうて活躍するさまを躍動感のあるタッチで描いた連作となっています。



写真8 一勇斎(歌川)国芳「誠忠義士伝 矢多五郎右衛門」

## 9. 錦絵にみる版画の技法

錦絵には版木に絵の具を塗って摺るだけでなく、さまざまな技法があります。旧新発田藩士の中村克夫家から寄贈された錦絵のコレクションから特徴的な技法を紹介します。

**ぼかし** 版木をあらかじめ湿らせてから絵の具を塗り、色のじみで濃淡を出す表現。

**空摺り・木目摺り・布目摺り** 着色ではなく木目を残したり、布をあてるなどした版木に濡れた紙を強く押し付け、凹凸を出す技法

**つや摺り** 絵の具が乾いてから摺り面の裏面に文様を彫った板をあて、表面から猪の牙でこすることで光沢を出す方法。見る角度を変えると図柄が浮き出る(ポスター・チラシ表面参照)。

**雲母摺り** 絵の具に薄めた糊を混ぜ、摺った上に砕いた雲母をまいて定着させ、表面にキラキラとした光沢を出す効果があります。



写真9 3代目歌川豊国「新舞台 大入ヲ鳥の町」

(背後の景色に木目摺りを施し夜の雰囲気を出している)

## 10. 明治時代以降に使われた木版

明治5(1873)年8月に学制が發布され、初等教育は国民の全てが就学すべきと定められました。学校で使用される教科書は編纂事業が進んでいなかったため、民間の出版物が充てられました。当館には、明治5～6年頃に新潟県下で初めて使用された歴史の教科書などが残っています。木版刷の和装本で江戸時代以来の技法で作られています。その後、西洋から金属製の活字を用いた活版印刷の技術が導入され、江戸時代以来続いていた木版の技術は衰退してゆきます。

一方、信仰にともなう、神社のお札・おみくじは、引き続き木版が用いられるものがあります。湯端天王村氏子中から寄進された「大吉」のおみくじは版木が残っており、側面に西洋式の丸釘が打たれているため、明治時代に入ってから使われていたようです。

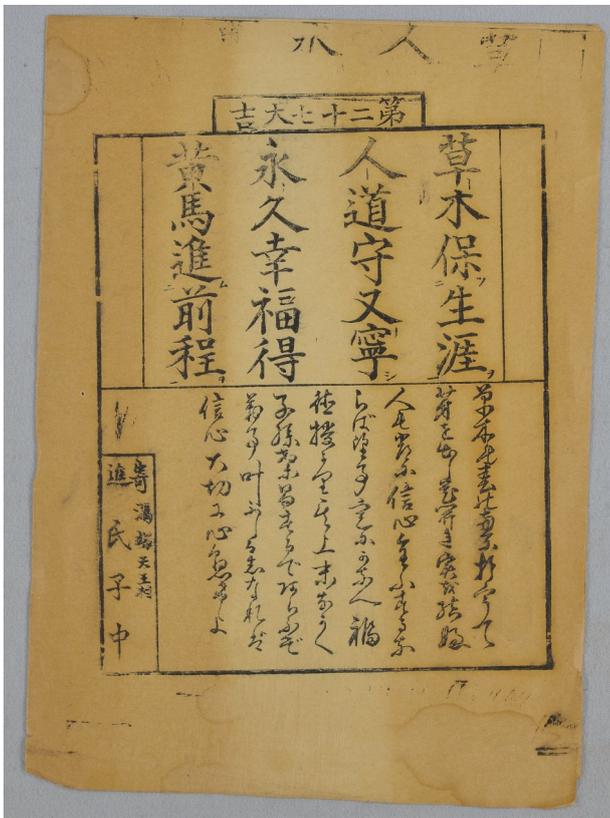


写真10 「天王村氏子寄進おみくじ札」

## 11. 佐藤六石の印章

佐藤寛は、字を公緯、号を六石という。元治元(1864)年に新発田藩士の家に生まれ、聖籠村の大野耻堂が主宰する私塾「己絆楼」で学び、新潟日日新聞編集長を経て上京し、皇典講究所で研究に携わります。そこで伊藤博文に認められて朝鮮李王家の顧問になり、皇太子英親王の侍講(君主に学問を講じる職)を勤め、修学院教授、慶応義塾・國學院の講師を務めた人です。漢詩人としても著名で、号の「六石」は生家の俸禄からとったといわれています。

当館には佐藤家ご遺族から寄贈いただいた蔵書・硯・印章などが「佐藤六石文庫」として保存されています。印章は漢詩などの落款用、蔵書印などが二つの印箱に納められています。印の側面には、制作者、制作年、寄贈者などが刻まれ、六石と篆刻家、交流があった人のとの関係を偲ぶことができます。



写真11 「佐藤六石印章・印箱」

### 主要参考文献

- 石井研堂1994『錦絵の彫と摺』芸艸堂
- 高橋明彦1997「新発田藩校道学堂の出版費用」『金沢美術工芸大学紀要』第41号
- 高橋明彦1999「新発田藩版とその版木」『金沢美術工芸大学紀要』第43号
- 日本民芸館1977『民藝』290号
- 新発田市教育委員会1980『村尻遺跡』I

高橋礼弥1974「六石佐藤寛先生」『新発田郷土誌』第7号

岡村 浩1991「佐藤六石翁とその自用印について」『新発田郷土誌』第20号

新発田市歴史図書館 春季企画展

「ハンコ・版画と印刷の歴史」

編集・発行：新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中央町4-11-27

刊行：平成31年2月22日